ジャイナ教と仏教②

ジャイナ教は真理をどう語るのか？

――悟りと一切知

堀田和義

前回は、ジャイナ教の開祖マハーヴィーラと仏教の開祖ブッダの生涯について解説し、それらが非常に類似していることを紹介した。その一方で、修行方法には大きな違いが見られ、さらにはその違いが両者の悟りの内容にも大きな影響を及ぼしている可能性を指摘した。今回は両者の成道に注目し、その内容を比較しながら紹介したい（以下、仏教における一切知に関しては、主として川崎信定『一切智思想の研究』の成果に基づく）。

成道の意味するところ

まず、「両宗教の開祖は何を悟ったのか？」という問いに対しては、広い意味ではその人が説いた教えのすべてがそれであると答えることもできる。しかしながら、伝記などにおける成道は、何らかの出来事、あるいは何か特定の内容を悟ったことを指すと思われる。

マハーヴィーラの場合、成道に相当するものとして、「一切知を獲得した」「一切知者になった」という表現がなされる。一方のブッダの場合も、同じく一切知者と呼ばれることはよく知られている（漢訳仏典では「一切智」という表記が最も多いが、以下、本稿では「一切知」で統一する）。例えば、パーリ語の仏典には、成道の際に一切知者の境地を獲得したことを述べるものがある。他にも、成道の直後に遭遇したアージーヴィカ教徒ウパカとの対話の際に、ブッダが自らのことを「一切知者」であると言う場面もある。これらのことから、ブッダは成道をきっかけとして一切知者になったと考えられる。

このように、ジャイナ教と仏教は、開祖の生涯だけでなく、悟りのあり方という点でも大きな共通点が認められる。では、同じ「一切知者」なのだから、その中身も同じなのかというと、そうはならない。

ジャイナ教の一切知

例えば、マハーヴィーラの古い伝記は、彼が「一切を見て、知った」と述べているが、このように「見る」と「知る」がセットになった表現は仏教にも認められる（ただし、以下においては、「知る」の方に焦点を絞る）。マハーヴィーラの場合、具体的には、

顕現しているか隠されているかにかかわらず、神々、人間、アスラを含む世界のあらゆる生き物の活動のすべてを見て、知ったとされる。この記述は、マハーヴィーラが何か特定の内容ではなく、文字通り「一切を見て、知った」ことを意味すると考えられる。また後代には、その知は無限であり、無上であり、無碍であり、覆われておらず、完全で、満たされたものであると述べる文献もある。このことから、ジャイナ教の一切知者は、一時に、過去・現在・未来の三時にわたるすべての実体とその様態を認識する者だと考えられている。

仏教の一切知

一方、ブッダの一切知の内容は、宿命智明（しゅくみょうちみょう）、天眼智明（てんげんちみょう）、漏尽智明（ろじんちみょう）という、三つの神通力を指すとされる。宿命智明とは、自分の様々な前世を思い出し、それにより輪廻（りんね）とその原因を知るものである。これはジャイナ教聖典でも、出家のきっかけとしてしばしば出てくるものであり、現代でも出家の理由としてそれを挙げる者がいる。天眼智明というのは、清浄な天眼によって、あらゆる生き物が業に従って死んでは生まれ変わる様を知るものであり、先述のマハーヴィーラが悟った内容の記述に通じるところがある。そして漏尽智明というのは、仏教の真理によって煩悩を滅し尽くすものである。

これら三つの中でも、仏の知と阿羅漢（あらかん）（修行者が到達可能な最高の位。もともとは仏の別称だったが、後に弟子たちの称号となった）の知の差別化を図るために、とりわけ漏尽智明が強調される。この点は、ジャイナ教における、マハーヴィーラ（ジナ）とそれ以外の一切知者の区別に似ている。マハーヴィーラ以外にも一切知者はいるが、ジナのように教えを広める者とならなかったことや、ジナの手助けがなければそのような境地に到達できなかったのを理由に、「一切知者ではあるが、ジナではない」とされる。

また初期仏典にも、ジャイナ教の場合のように、一時に一切のものを知る一切知者に関する記述が見られるが、ブッダ自身はそのような一切知のあり方を否定している。そして、ブッダの一切知は、その種のものではなく、知ろうと望んだ時に知ることができる能力を意味するとされる（ただし、大乗仏教においては、一時にすべてを知る認識という解釈もある）。このようなことから、初期仏教における一切知というのはあくまでも比喩的な表現であり、法や真理を知ることの方が重視されていたと指摘する者もいる。

一切知と自我

以上のような違いをもたらした背景の一つに、ジャイナ教独自の自我に関する見解や修道論があると考えられる。ジャイナ教は無我説を主張する仏教とは異なり、アートマンに相当する自我（以下、霊魂と呼ぶ）の存在を認める。そしてこの霊魂は、本来は無限の知、無限の見、無限の楽、無限の力を備えているが、身体、言葉、心の活動によって物質からなる業を取り込み、それらが纏わりつくことで本来の力を発揮できないでいるとされる。逆に言えば、苦行などの実践によってこの業が取り除かれると、霊魂が本来的に備えている無限の知が発揮され、意図しなくても外界の

対象がすべて映り込んでくるのである。

また、ジャイナ教の二大宗派である白衣派と空衣派からその権威を認められている綱要書では、認識を①感官による知、②聖典に関する知、③直観的な知、④他人の心を読む知、⑤一切知という五つに分類し、それらのうちの①～③を間接的な知、④と⑤を直接的な知としている。インドの認識論において「直接的な知」と言った場合には、五感を用いた感覚器官による認識を指すのが一般的である。それにもかかわらず、五感を用いない、霊魂そのものによる超感覚的な認識を直接的なものと考える点は、ジャイナ教の一切知を考えるうえで興味深い。

一切知者と言語表現

一切知者の存在は、ジャイナ教が何らかの命題を述べる際の姿勢にも大きな影響を与えたと考えられる。ジャイナ教では何らかの命題を述べる際に、「ある点から見れば」という限定を付けなければならないと主張するが、その背景にあるのは、一切知者以外の普通の人の視点は限られており、そのことを厳密に表現すべきだという考え方である。このような見解は「スヤード・ヴァーダ」や「アネーカーンタ・ヴァーダ」（「相対主義」「不定主義」「多面主義」「非極端説」など、様々な訳語がある）と呼ばれ、ジャイナ教の代名詞にもなっている。

一切知者以外の普通の人の視点が限られているという発想は仏教の中にも認められる。一切知者である如来は、世俗を離れた究極的なものを、差別のない平等な無分別知によって、一時にそのまま捉えることができるが、世俗的なレベルでは、いかなるあり方でも認識したり、表現したりできないという考え方である。ただし、仏教の場合には、認識や表現が不可能だというところでとどまり、ジャイナ教のスヤード・ヴァーダのような「ある点から見れば」という限定付き表現の使用へと向かうことはなかったようである。

ジャイナ教の縁起説

また一切知の獲得ではなく、「何を悟ったのか？」という問いに対しては、ブッダの場合、十二支縁起がそれにあたるとしばしば言われる。一切知の文脈で出てくるものではないが、実はジャイナ教聖典にも仏教の十二支縁起とよく似たものが見られる。ジャイナ教聖典『アーヤーランガ』では、「怒り→高慢→虚偽→貪欲→愛着→過失→迷妄→胎→生→死→地獄→畜生→苦しみ」というプロセスが提示されている。前半部分は多少異なるが、仏教の無明に相当する「迷妄」をきっかけとして再生し、生や死を経て苦しみに至る点が共通している。

一切知者をめぐる議論

以上に述べたようなタイプの一切知者は、『リグ・ヴェーダ』や『ウパニシャッド』などの文献には見られないため（ただし、それに近いニュアンスの言葉は見られる）、それほど古くに遡ることができるものではなく、ジャイナ教や仏教の影響で一般的になったと考えられている。そして中世以降になり、インドの思想界で

有神的な傾向が強くなると、一切知はヒンドゥー教の神々の属性にもなった。

後代になると、「一切知者」という考え方は、主として、インド思想の正統派ともいえるミーマーンサー学派から厳しく批判された。彼らはヴェーダ聖典に絶対的な権威を認め、そのヴェーダ聖典の権威を保証する根拠として、しばしば「人間が作ったものではないこと」や「永遠であること」などを挙げる。彼らの考えでは、人間というのは間違いを犯す不完全な存在であり、そのような者が説いた教えは信用できず、一切知者などというものもありえないということになる。

これに対して、ジャイナ教と仏教は精力的に一切知者の存在を論証した。両者の文献を見ると、お互いの論法を借用しながら、共同戦線を張っていた様が見て取れる。このように「一切知者が存在する」という点では足並みを揃えているが、「では、誰が一切知者であるのか?」という点に話が及ぶと、急にお互いを批判し合っている。先に見たように、使っている「一切知」という言葉が同じであるだけで、その内容が異なるという事実に鑑みれば、もっともなことであると言えるだろう。

第三回では、両宗教の開祖以前に存在したとされる過去仏や、両宗教を取り巻く神々について考えてみたい。

ほった・かずよし▼大谷大学任期制助教。ジャイナ教。

没後50年 未発表論攷
鈴木大拙
無量光・名号
〈英文対訳〉 東西霊性文庫❼
50年代にアメリカで行なった講演が元の論文と、近年発見された大拙自身の補足修正入り講演資料の2本を英文対訳で完全収録 B6・1,480円+税

"なぜ共生できないのか"
宗教の壁を乗り越える
多文化共生社会への思想的基盤
宮本久義+堀内俊郎 編
まざまな差別を抱える社会において、共生を阻むいかなる要因があるのかを宗教問題を通じてあらためて検証し、それらを克服する思想基盤を構築する
A5・2,500円+税

密教とは何か
現代語訳『大日経住心品疏』を読む
福田亮成
弘法大師に聞くシリーズ別巻❷
人間存在の心の種々相を六十に及んで分析し、ひいてはそれが「浄菩提心」構築の過程ともなる様を克明に描く。「住心品疏」に、原文・要語解説・現代語訳をそえて丁寧に読み解く
A5上箱・14,000円+税

大乗仏教と浄土教
小澤憲珠名誉教授頌寿記念論集
善導寺法主阿川文正師の序文を筆頭に38論攷が寄せられた最新の学術論集
A5上箱・23,000円+税

オキナワを歩くVI
〔資料編〕飯上げ体験
元宮古高女・八重山高女学徒隊員沖縄戦を語る〈いのちを見つめる叢書別巻❻〉 広島経済大学岡本ゼミナール編
付・DVD80分/A5・980円+税

図書出版 ノンブル社
東京都新宿区西早稲田 1-8-22-2F
Tel.03-3203-3357 Fax.03-3203-2156
http://www.nonburusha.co.jp/

ISSN 1343-6198
平成28年3月25日発行
毎月1回25日発行
No.577

春秋 Shunjū

2016
4

巻頭エッセー 清朗な良寛像を描く
——『根源芸術家 良寛』出版に寄せて 新関公子 1

聖徳太子の実像と以後の太子観の変遷 石井公成 5

新連載 第三の生命 〈いのち〉でたどる東洋思想❶ 小倉紀蔵 9

生と死のエコロジー ダウンシフトの技術(アート)❸ 辻 信一 13

ジャイナ教は真理をどう語るのか?——悟りと一切知
ジャイナ教と仏教❷ 堀田和義 18

森有正先生とバビロンの流れ
日本オルガン小史❼ 馬淵久夫 22

愛しいもの 指鬘物語❿完 田口ランディ 27

京都十景❷ 秀吉が変えた観桜スタイル——花宴から花見へ 鳥居本幸代

春秋社